

論 文

ヴィーラントの翻訳

— 『マクベス』 諸翻訳と訳註との比較検証を通じて —

加 藤 健 司

1. はじめに

1776年5月号の文芸誌「Der Teutsche Merkur ドイツのメルクーール」に、ビュルガー（Gottfried August Bürger; 1747-1794）による「ホメロス『イリアス』第六書」のドイツ語訳が掲載された¹。当時『イリアス』翻訳にあたって「ホメロスの精神に近いのは、はたしてヤンプスかあるいはヘクサーメターかが議論的であった²」が、ビュルガーはヤンプスを選択している。掲載に先立ち、当該誌を主宰するヴィーラント（Christoph Martin Wieland; 1733-1813）は書簡で、「メルクーール誌の読者のみなさんとこの喜びを分かち合いたい³」とビュルガーに伝えている。そして同年同誌10月号ビュルガー「ドイツ語版ホメロスについての友人への書簡⁴」についても、「ヘルダー、ゲーテそして私は喝采を送っております⁵」と賛辞を続ける。さらに年が明けた1777年2月には「我々は、あなたのホメロス、ドイツの武具を身につけドイツの偉力を帯びたホメロスを中心に楽しみしております⁶」と、ドイツ語化あるいはドイツ化された『イリアス』の完成をヴァイマルの主要な文学者たちが待ち望んでいるようすを伝えた。

しかしながら、「ゲーテ、ヴィーラントがたいへん気に入る、（…）それがビュルガーを大いに後押しするはずだったにもかかわらず、気分屋の詩人は自らのこの企てを放棄してしまった⁷」。なぜ、ホメロス翻訳は完成をみなかったのか、それについては、ベティヒャーのごとくビュルガーが「気分屋」であったからとか、あるいはビュルガーの友人で伝記的追想を記したアルトホフのように「ビュルガーにはせっかくのよい計画をやり遂げる粘り強さが欠けていた⁸」といった指摘

1 Der Teutsche Merkur (TM). May 1776, S. 146-168.

2 Häntzschel, Günter: Gottfried August Bürger. Beck'sche Reihe, Autorenbücher. München: Beck 1988, S. 14. ヤンプスは弱強、古典叙事詩で用いられたヘクサーメターは6揚律のダクテュルス（強弱弱）を基本とする。

3 An Bürger in Wöllmershausen. Weimar, den 22. April 1776. Wielands Briefwechsel (WB). Bd. 5. Berlin: Akademie-Verlag 1983, S. 498.

4 TM: Okt. 1776, S. 46-67.

5 An Bürger in Wöllmershausen. Weimar, den 12. November 1776. WB: Bd. 5, S. 568.

6 An Bürger in Wöllmershausen. Weimar, den 22. Februar 1777. WB: Bd. 5, S. 594.

7 Böttiger, Karl August. Literarische Zustände und Zeitgenossen. Hrsg. von Klaus Gerlach und René Sterne. Berlin: Aufbau-Verlag 1998, S. 236 (Den 15. July 1798 bei Wieland in Osmanstädt (sic)).

8 Bürger, Gottfried August. Sämtliche Schriften. (SS) Hrsg. von Karl Reinhard. Bd. IV Hildesheim/New

がなされている。さらに踏み込んでヘンチェルは、「もっぱらビュルガーの無気力だの集中力の不足に帰すのは、この作家に対して不当であろう。(…) 経験不足、他者との議論の不足、未完成なものの方の見方、そういった点に原因があった」と複合的な理由を想像している⁹。

本稿は、このようにヴィーラントと翻訳を巡る接点を持ったビュルガーの翻訳から両者に共通するシェイクスピア『マクベス』の翻訳を取りあげ、さらにのちのシュレーゲル (August Wilhelm Schlegel: 1767-1845) / ティーク (Johann Ludwig Tieck: 1773-1853) による『マクベス』翻訳との比較をしながら、ビュルガーとシュレーゲル/ティーク、ヴィーラントの翻訳の特性を、とくにそれぞれに付された脚註に注目しながら理解し、さらに18世紀から19世紀にかけての翻訳界における翻訳者ヴィーラントの位置付けについて考える端緒とするのを目的とする。

2. ゲーテとヴィーラントの翻訳

小説、韻文物語をはじめとして多作な作家ヴィーラントには翻訳も少なくない。

- 1) W. Shakespeare: Theatralische Werke. Aus dem Englischen. 8 Bde. Zürich: Orell & Geßner 1762-1766. 『シェイクスピア演劇集』
- 2) Horazens Briefe aus dem Lateinischen übersetzt und mit historischen Einleitungen und andern nöthigen Erläuterungen versehen. 2 Bde. Dessau: Buchhandlung der Gelehrten 1782. 『ホラチウス書簡集』
- 3) Dschinnistan, oder Auserlesene Feen- und Geister-Mährchen. Theils neu erfunden, theils neu übersetzt und umgearbeitet von Ch. M. W., F. Hildebrand von Einsiedel u. J. A. Liebeskind. 3 Bde. Winterthur: Steiner 1786-1789. 『ジニスタン 精霊の国』
- 4) Horazens Satyren, aus dem Lateinischen übersetzt und mit Einleitungen und erläuternden Anmerkungen versehen. 2 Bde. Leipzig: Weidmann's Erben & Reich 1786. 『ホラチウス諷刺詩集』
- 5) Lucians von Samosata Sämtliche Werke. Aus dem Griechischen übersetzt und mit Anmerkungen versehen. 6 Bde. Leipzig: Weidmann's Erben & Reich 1788-1789. 『ルキアノス全集』
- 6) Euripides: Ion. Aus dem Griechischen übersetzt und erläutert. Leipzig 1803. エウリピデス『イーオン』
- 7) Euripides: Helena. Aus dem Griechischen. Leipzig 1804. エウリピデス『ヘレーナ』
- 8) M. Tullius Cicero: Sämtliche Briefe übersetzt und erläutert. Vollendet und zum Druck

York: Olms 1970 (Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Göttingen 1802), S. 116 („Einige Nachrichten von den vornehmsten Lebensumständen Gottfried August Bürgers“ von Ludwig Christoph Althof).

9 Hüntzschel: S. 19. もちろんこういった内的理由と並んで、シュトルベルク、フォスなどがホメロスをヘクサーメターで翻訳し好評であったことなど、外的理由も無関係ではなかったであろう。Vgl. Gottfried August Bürger. Sämtliche Werke. Hrsg. von Günter und Hiltrud Hüntzschel. München/Wien: Carl Hanser 1987, S. 1406 („Nachwort“).

befördert von F. D. Gräter, 7 Bde, Zürich; Geßner 1808-1821. 『キケロ全書簡』

9) Aristophanes; Die Ritter oder Die Demagogen, Die Vögel, Wien; Doll 1813. アリストパネス
『騎士・鳥』

この他にも自らの雑誌「ドイツのメルケール」や「Attisches Museum アッティカ詩神館」において古典古代作品を多く翻訳紹介している。

したがって1813年のヴィーラント没後1年目にロッジでの弔辞で、ゲーテがヴィーラントの翻訳についても取り上げて詳細に語ったのは故なきことではない。

二つの翻訳原理があります。一方は、異国の作者が私たちのもとまで連れて来られて、私たちがその作者をあたかも同国人のように見ることができのを求め、そしてもう一方は、逆に私たちが異国に赴き、その状況の、その話し方の、特徴のなかへと身を投じるのを求めるのです。さまざまな模範的前例がありますから、教養人にはそれぞれの長所がじゅうぶん知られています。われらが友人〔ヴィーラント〕は、ここでも中庸の道を求め、両者を結びつけようと努力しました。そして、感情と趣味の人として、その狭間で迷ったときには前者を優先したのです。

注目すべきは、ヴィーラントが手始めにわれわれをその時代へと移し、その人々と馴染みにさせようと努力を払い、しかるのちに、その著者にわれわれがすでに知っている、われわれの感覚と耳に違和感のない語りをさせ、さらに最後には、およそ曖昧な部分、疑義のある部分、不快感を誘う可能性のある部分を脚註において解説したり取り除いたりする、その姿なのです¹⁰。

ゲーテは『西東詩集』の解説のなかで翻訳のありかたを時代的三段階に分類しているが、ここでもヴィーラントをその第二期に入る翻訳者として取り上げて論じている。

翻訳には三種類がある。第一は、我々自身の考えのままに異国と我々とを出会わせる。素朴な散文形式がここでは最もふさわしい。(…) 第二世代がこれに続く。そこでは確かに異国のさまざまな状況に置かれるが、それは未知の Sinn 感覚／意味を身につけて自分自身の Sinn 感覚／意味づけで再度描出しようとするものである。この時期を私は極めて純粋な語義でのパロディ的時代と名づけたい。このような作業に進んで取り組むのは多くの場合機知

10 Goethe, Johann Wolfgang. Sämtliche Werke. (GSW) Bd. 12 München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1977, S. 704-705 (Unveränderter Nachdruck der Artemis-Gedankausgabe zu Goethes 200. Geburtstag). 後にシュライアーマッハは、übersetzen (翻訳する) と dolmetschen (通訳する) を区別した上で総称としての übertragen を用い、Paraphrase (意訳) と Nachbildung (直訳) の両者を指摘したが、その翻訳に係る議論も、基本的にはここでのゲーテに近似した二元的翻訳論と考えられよう。Schleiermacher, Friedrich: Ueber die verschiedenen Methoden des Uebersetzens (sic). In: Sämtliche Werke. 2. Bd. Berlin: Reimer 1838, S. 207-245.

に富んだ人物である。フランス人たちは、およそ詩的作品の翻訳についてはこの方式をほしいままにしている。数多あるなかからドリル¹¹の翻訳にいくつかの例を見ることができる。このフランス人は、異国の言葉を口当たりよくし、感情と思想とさらにさまざまな事物についてさえそれを貫き、異国の果実に自身の土と大地から育った代替物を徹頭徹尾求めていったのである。

ヴィーラントの翻訳はこの種のものである。この作家も独自の理解と趣味の感覚を備えて、それをもって古代に、異国に近づいていったのだが、それらは自分にとってふさわしいと考えた場合のみであった。この優れた人物はその時代の代表するひとと見なされてよいだろう。自身に心地よいもの、まさにそれを自分の内部に取り込み再度それを伝達した。それは同時代人たちにとっても心地よく味わい深いものであり、その影響はきわめて大きかったのである¹²。

続けてゲーテは翻訳の時代の第三期であり最終段階の翻訳のあるべき姿を述べる。

しかしながら我々は完全さのなかにも不完全さのなかにも長く留まっていることはできず、別のものへの変化がつねに生じなければならないのだから、その結果第三の時期を経験したのであり、それは最上でかつ最終と呼ばれるべき時期である。すなわち翻訳を原典と同一にして、あるものの代わりになにか別のもの、ではなく、あるもののその場所に別のものが相当するようにする、そのような時期である。

この方法は、当初たいへんな抵抗に遭った。なぜなら、原文に強く固執する翻訳者は、多かれ少なかれ自国民の固有性を放棄するのであり、しかしそうして第三のものが生じて、そこへ向かってはじめて公衆の趣味は育っていかねばならないからである。

賞賛してもしきれないフォスは、当初読者を満足させることができなかったが、次第しいにひとびとはこの新しい方法に耳を傾けて心地よく感じるようになったのである¹³。

すなわち、ゲーテが考えたヴィーラントの翻訳とは、自己の趣味を尺度としてドイツ語を解するひとびとにとって馴染み深い言葉で非ドイツ語の文学を伝える、というものである。果たしてこのゲーテの評は妥当であるのか、そして、ヴィーラントという翻訳者は、第三期の成熟した翻訳

11 ジャック・ドリル (Jacques Delille: 1738-1813) はウェルギリウスの翻訳で知られる。ヴィーラントは書簡において一度だけドリルについて言及している。「きわめて優雅で愛嬌のある微笑みの元修道院長ド・リル(cj-devant Abbé de Lille)のものはまだ通読する時間がないままだ。とはいえ、数日ゆっくりできるので読めるだろう」(An Karl August Böttiger. OBmannstedt, 20. Februar 1801. Freitag. WB. Bd. 15. 1, S. 377)。「ヴィーラントがどの作に言及しているのかは不明。可能性としては、詩“Les jardins ou l'art d'embellir les payssages”, Paris 1782 あるいは“L'homme des champs, ou les géorgiques Francoises” Paris 1800が考えられる。」(WB. Bd. 15. 2, S. 361)

12 GSW: Bd. 3, S. 554-555.

13 GSW: Bd. 3, S. 555-556.

以前の過渡期の翻訳者に過ぎないのであろうか。

3. ヴィーラント、ビュルガー、シュレーゲル／ティークの『マクベス』

1761年から1766年にかけてヴィーラントはシェイクスピア戯曲のうち、まず『真夏の夜の夢』を韻文訳として、残りは散文訳として合計22編をドイツ語に翻訳した。

「ヴィーラントのシェイクスピア翻訳は、ドイツにとって前代未聞であった(…)にも関わらず、このプレゼントに対して周りじゅうから注がれたのは怒りであった、たとえば、シュトゥルム・ウント・ドラングの若者たちは、ヴィーラントが本文に付したフランス風の脚註、あるいは原文を滑らかにし過ぎていると受け取られた翻訳紹介のありかたなど¹⁴を酷評した。この翻訳は最初にまとまった形でシェイクスピアをドイツに紹介したという功績に留まる、またあるいはそもそもヴィーラントの翻訳はその創作よりも優れているという評価など¹⁵、毀誉褒貶いずれにしても、18世紀から19世紀にかけて翻訳についてはヴィーラントに対して厳しい評価が目につく。「不当な批評に嫌気がさした」ヴィーラントに対して「出版者は新版を求めたがヴィーラントは断った。しかし、その翻訳は影響を与え続けたのである。ヴィーラント訳のうちに、そしてその翻訳を通じて、シェイクスピアはドイツの舞台上に君臨した」のもまた確かである¹⁶。

確かに最初に手がけた一作のみ韻文訳で残りは散文とした点や、ヴィーラント自身が珍しく正面から批評家たちに向けて自身の翻訳を擁護した文章のなかでも認める誤訳¹⁷も含め、このシェイクスピア訳は、原典にじゅうぶん忠実な翻訳とは外面上捉えがたい。ではヴィーラントのシェイクスピア翻訳はいかなる視点から検証されるべきであろうか。

さまざまなシェイクスピア校訂版のうち、ヴィーラントが底本としたのは、あまり評価の高くないウォーバートン版¹⁸である。試みに本稿で取りあげる『マクベス』について現代のケンブリッジ版¹⁹とウォーバートン版を比較すると、もっとも目につくのは幕・場の分け方であり、それ以外のテキスト本文についてはそれほど大きく異なっていない。そして異なる場合はたいていウォーバートンに脚註がある、すなわち、そもそもテキスト本文について疑義を生じやすい箇所との異同である。

さて、ヴィーラントのシェイクスピア翻訳の特徴については、たとえば『マクベス』でヘカター

14 Ferber, Sascha: Die Geschichte der Vorurteile: Wieland-Rezeption im 19. Jahrhundert. Frankfurt/M: Peter Lang 2013, S. 225.

15 Ferber: S. 225-230.

16 Christoph Martin Wieland. Gesammelte Schriften. (GS) 2. Abt. Übersetzungen II (3) Hrsg. von Ernst Stadler. Hildesheim: Weidmann 1987 (Nachdruck der 1. Auflage Berlin 1911), S. 578 („Nachwort des Herausgebers“).

17 GS: S. 566-569 („Einige Nachrichten von den Lebens-Umständen des Herrn Willhelm Shakespear (sic)“)

18 The Works of Shakespear. (sic) With a comment and notes, critical and explanatory by Mr. Pope and Mr. Warburton. (Warburton) Vol. 6. Dublin 1747, S. 293-378. (本稿では、「秋田大学図書館貴重資料デジタルギャラリー」で公開されている資料を参照した。)

19 The Works of Shakespeare. Macbeth. London: Cambridge University Press 1960.

と魔女たちが登場する場面が挙げられよう。ヴィーラントは、「この場面と第四幕第一場は、別の言語に移しがたい。四揚のヤンプスと韻の調子を欠くならば、別ものに過ぎなくなるし、この場面の不気味ながらも優雅な魔女の姿は雲散霧消するであろう」²⁰と、脚註に述べて、本文では以下のように翻訳ではなく要約を掲載するに留めた。

第六場 場面は荒野へと替わる。雷鳴と稲妻。三人の魔女が登場しヘカテーに会う。

ヘカテーが三人姉妹に小言をいう、三人が勝手にマクベスに謎めいた予言を与えて拐かし、上に立つ自分にはまったく知らせなかったからである。ヘカテーはこれに対して三人にアケロン河の泉に朝来て、その際にはそれぞれの壺や魔術に用いるあれこれを持参するように命じる。自分は、月より霧を集め来て、魔力を用いてマクベスの眼前に諸霊を産みだし、あらゆる幸運の波や死をも免れると愚かにも確信をさせて、破滅へと誘うつもりだという。続いて音楽と歌がきこえる。ヘカテーは、スピリトゥス・ファミリアリス 守護霊が自分を呼んでいるといい、魔女たちは四散する。(107)²¹

ヴィーラント自身が述べるように、ここでは、薄気味悪いながらも優雅な原文の調子をドイツ語で表現するのは諦めて内容のみが紹介されている。ヴィーラントは、「シェイクスピアはまさに作品のいたるところで、ことば遣いが固く、柔軟性を欠き、装飾過多で、曖昧である。したがって、翻訳においてもそうなるのである、というのはドイツの人びとにシェイクスピアのありのままを紹介したいと考えるからだ。(…)シェイクスピアを綺麗に整えようとするならば、たちまちシェイクスピアはシェイクスピアではなくなる」²²と述べる。ありのまま紹介するのが基準であるためヴィーラントは、それができないと判断した箇所は、なんらかの代替物を置くのではなくここでのようにむしろ要約を読者に提供する道を選んだわけである。そしてその結果として、ヴィーラントの翻訳は演じることが目的ではない「読むための翻訳」となった。

一方、ビュルガーは当該場面をドイツ語に移している。ウォーバートン版では以下のような第三幕第六場冒頭である。ちなみに原文引用部分は、現代のケンブリッジ版と正書法以外同様であり、シェイクスピア戯曲を代表する韻律ブランクヴェースではなく、ヴィーラントの脚註でも解説されていたようにヤンプスで脚韻も踏んでいる箇所である。比較のためにウォーバートン版英語原文とともにビュルガーの原文も挙げてみよう。

1 Witch. Why, how now, Hecat' you look angrily.

20 GS: S. 107.

21 ヴィーラント訳『マクベス』の引用については、全集GSにより本文に頁数のみを記す。

22 GS: S. 566 („Einige Nachrichten von den Lebens-Umständen des Herrn Willhelm Shakespear (sic)*”).

Hec:	Have I not reason, Beldams, as you are? Sawcy, and over-bold! how did you dare To trade and traffick (sic) with Macbeth, In riddles, and affairs of death? (344) ²³
第一の魔女 ヘカテー	どうしてなの、ヘカテーご機嫌斜めだけど わけもなくっていうのかい、婆ども、お前たち同様に？ 生意気な、身の程知らずめが！よくもまあ マクベスと関わり合って 謎かけで、そして殺しの数々までを。
Erste Hexe.	Was schmollst du, Mutter?
Zweite Hexe.	Rede doch!
Altfrau,	Wie, Freche Vetteln, fragt Ihr noch? Wer hieß so heimlich und im Dunkeln Euch jüngst allein mit Macbeth kunkeln? Und kaufen Hochverrath und Mord Für Eur prophetisch Zauberwort? (317-318) ²⁴
第一の魔女	なんで怒っているのさ、かあさん？
第二の魔女	教えてちょうだい！
老婦人	なんで、この恥知らずの婆ども、尋ねる必要があるかい？ だれが、近ごろこっそり知られぬように お前らだけでマクベスにちょっかいだせと命じたっての？ そして大逆と殺人を手にしると、 お前たちの運命を読む呪文を与えてやってさ。

このように、当該箇所についてビュルガーは翻訳というよりは韻文で大意を伝えている。

一方、マローン版を中心に、ジョンソン版、スティーヴンス版なども参照とした²⁵シュレーゲル/ティーク訳では、ヴィーラントが回避した当該箇所の翻訳が、韻文で実現されているのが確認できる。

23 ウォーパートン版引用については、本文中に頁数のみを記す。

24 ビュルガー訳『マクベス』引用については、全集SSにより本文中に頁数のみを記す。

25 Jansohn, Christa: Prolegomena zu einigen zukünftigen Forschungsaufgaben. In: Die Shakespeare-Übersetzungen August Wilhelm Schlegels und des Tieck-Kreises. Kontext - Geschichte - Edition. Hrsg. von Claudia Bamberg, Christa Jansohn und Stefan Knödler. Berlin/Boston: De Gruyter 2023, S. 13.

1. Hexe.	Was giebt es, Hecate, warum so zornig?
Hec.	Ihr garst'gen Vetteln, hab' ich denn nicht recht? Da Ihr Euch, dreist und unverschämt, erfrecht, Und treibt mit Macbeth Euren Spuk, In Räthselkram, in Mord und Trug? (319)
第1の魔女	どうしたの、ヘカテー、なぜそんなに怒って？ 無作法な従姉妹どもが、これが訳もなくだとも？ お前たちは、厚かましく恥知らずにも、大胆に、 マクベスにお前たちの魔法を見せて、 くだらない謎かけで、殺人と惑わしに。

形式もヤンプスで脚韻も踏みながら、シェイクスピアの意をドイツ語でむしろ簡潔にかつ十分に伝える翻訳である。とはいえここで『マクベス』の翻訳を担当しているドロテア・ティーク (Dorothea Tieck: 1799-1841) が、けっして簡単に翻訳を進めたわけではないのは父ルートヴィヒ・ティークによる『マクベス』への巻末註に明らかである。

われわれは、あらゆる観点から相応しい注力をすべくこの悲劇を最後に回したのであるが、それは、この偉大な作者の全劇作のなかでも本作こそがおそらくはもっとも理解の難しい作であり、翻訳者は最大級の困難に迎えられるからである。(…) 対象を捉え目の前に描き出す壮大で魔術的な方法に対応する、この詩作品 [『マクベス』] の驚くべき言語について指摘をしたが、このような言語はシェイクスピアの他作品では見出されない。まったくもって非正統的で、多義的で、秘密に満ちて、言葉と語りがまったく新しい未知の意味を持っている、それがゆえに、この悲劇の理解はかくも困難となり、その翻訳はほとんど不可能となっている²⁶。

一方ピュルガーについていえば、この場面に対してヴィーラントと異なりとにかくはドイツ語に移しているわけだが、それは主としてピュルガー訳の成立事情によると推察される。ピュルガーは序文において自ら述べるように、「1777年著名俳優のシュレーダー氏にハノーファーでマクベスを上演すべく」、ヴィーラント版では要約が示された「かの魔女の場面をドイツ語訳するよう求められ、すぐに完成させた」²⁷。そしてその部分訳の作業を終えたのちに、今度はヴィーラント訳を下敷きにした『マクベス』全体の「改訳作業」²⁸を任された。翻訳にあたっては、「意味のとらえ方の相違、原典の力の感じ方の相違、あるいは、私の手法・ことば遣い・表現のしかたで変

26 Shakespeare's dramatische Werke. (SW) Uebersetzt von August Wilhelm von Schlegel, ergänzt und erläutert von Ludwig Tieck. 9. Theil. Berlin: Reimer 1833, S. 393-399.

27 SS: S. 243.

28 SS: S. 244.

更せざるを得ない箇所を除き、[ヴィーラント訳に] 従い²⁹ながら、俳優から演じるために依頼された翻訳を終えた。

では、ビュルガー訳は舞台上で演じるためにヴィーラント版を補った翻訳と考えるべきであろうか。実はいくつかの例を引くことによって、ビュルガー版は上演を強く意識した翻訳ではあったが、内容はむしろヴィーラント訳の簡略版と評せることが明らかである。ここでは、両者の翻訳自体の相違を観察すべく、ドイツ語原文と合わせて引用する。

ビュルガー：

Lady. Komm in dieß einsame Zimmer! – Was für Wunderdinge! Sie haben meine Seele so empört, daß sich Alles darin durch einander jagt, wie in einem Hause, vor welchem sich unvermuthet ein vornehmer Gast meldet. – Glamis! Cawdor! Eingetroffen auf das pünctlichste! Und doch noch oben drein: Glück auf, König dreinst! – Es ist doch wohl kein Goldfund im Träume?

Macbeth. So viel ist und bleibt ausgemacht, daß sie mehr, als Sterbliche wissen. (267-268)

マクベス夫人：どうぞこの淋しい部屋のなかへ！なんというすばらしいこと！その知らせに、わが心は高く舞い上がり、すべてが心の中で絡み合うように追いかかけ合い、あたかも家のなかであって、思いがけず貴人の訪問を受けるように。—グラミス候！コードール候！ぴったりのご到着！まだまだおまけのそのうえに、ご機嫌よろしく、未来の国王さま！—夢から醒めたら水の泡ということではございますまい？

マクベス：申した通りだけのことが定めということだ、あのものたちは、人間よりもよく見えているということだ。

ヴィーラント：

Lady. (...) Komm, dike Nacht! Und hülle dich in den schwärzesten Dampf der Hölle, damit mein scharfer Dolch die Wunde nicht sehe, die er macht, noch der Himmel durch den Vorhang der Finsterniß guke, und ruffe: Halt, halt! –

(Macbeth tritt auf.)

Grosser Glamis! würdiger Cawdor! (Sie umarmt ihn.) Grösser als beydes durch den Gruß der auf diese folgte! Dein Schreiben hat mich aus dieser armseligen Zeit hinweggerückt, und ich fühle im Gegenwärtigen schon das Künftige.

Macbeth, Theurste Liebe, Duncan kommt diese Nacht hierher. (82-83)

マクベス夫人：来たれ、深き夜よ！そして地獄の漆黒の霧のなかに身を隠し、わが鋭き白刃がその傷を見ぬように、自らがもたらすその傷を、そして天が薄暗闇の帳を通し、のぞき見

29 SS: S. 244.

てこう叫ばぬように。止せ、止めよ！と。

(マクベス登場)

ああ偉大なるグラミス候，素晴らしきコードール候！（夫人はマクベスを抱く）そしてその両者よりもそれに続くものによれば，さらに偉大な！あなたさまの知らせでこの哀れな時から解き放たれ，いまここにありながらすでにかの将来を感じています。

マクベス：心より愛する妻よ，ダンカンが今宵こちらに来られる。

本来マクベスの妻が夫からの知らせを読みあげる場面にはじまる箇所が，ビュルガー訳では書簡の存在をなしにして，全体が再構成されている。一方引用では知らせを読みあげる部分は省略したが，ヴィーラント訳では冒頭書簡場面も含めてウォーバートン版原文に沿った翻訳となっている。この引用箇所のみならず原典あるいはヴィーラント版からの省略や再構成が目につくビュルガー版は，アダプテーションとも呼び得る翻案的翻訳である。ヴィーラント版はゲーテの指摘にあったように困難な箇所については，脚註で元テキストを解説しドイツ語に移さないという例も含む「中庸の道」を取ってはいるものの，ビュルガーとは異なり，まずはシェイクスピアのテキスト全体像を伝えようとした翻訳であると指摘しておきたい。

4. 翻訳におけるパラテキストとしての脚註の諸問題

先述のように，ビュルガー版『マクベス』は，ヴィーラント版では要約のみ提示された箇所の台詞などを補いつつも全体としては上演用アダプテーションと呼べるが，一方でヴィーラント版『マクベス』のほうは，しばしば批評されてきたように単に不徹底かつ不完全な翻訳に過ぎない，あるいはゲーテが指摘するように，「自身に心地よいもの，まさにそれを自分の内部に取り込み再度それを伝達したが，それは同時代人たちにとっても心地よく味わい深いもの」であるに過ぎないと判断するべきであろうか。

ミッタークは，ヴィーラント初期創作とくに小説について脚註のパラテキスト性について，もっぱらジュネット・ジュネットの議論に基づいて論じているが³⁰，実のところ，すでに触れてきたように，ヴィーラントは創作のみならず翻訳においても脚註を多用する。

創作作品における脚註は，ジュネットが指摘するように「パラテキストの，かなり捉えどころのない，漠然とした要素である」³¹。そのつかみ所のなさは，脚註が「作者によるオリジナルな注の本質的機能とは，補完の，ときには余談の，ごく稀には注釈の機能」³²をもってテキスト本文に関わっているからであり，それゆえ独立したパラテキストと呼ぶことさえ躊躇われるような，

30 Mittag, Frank Gerhard: Politik mit Paratexten. Heidelberg: Winter 2018. とくに S. 237-360.

31 ジュネット，ジュネット『スイユ』和泉涼一訳 東京：水声社 2001, S. 387. (原著：Genette, Gérard: Seuil, Editions du Seuil. 1987)

32 ジュネット：S. 372.

「テキストとパラテキストが相接するまことに定かならぬ境界」³³に存在しているからに他ならない。残念ながらジュネットはヴィーラントをまったく引用していないが、ジュネットが挙げる虚構的脚註、登場人物による脚註、オリジナルな脚註、遅延的・事後的脚註いずれもヴィーラントの創作には当てはまるものである³⁴。

しかしここではヴィーラントの創作には立ち入らず、もっぱら翻訳におけるその脚註について考察しなければならない。ジュネットは、翻訳における脚註については独立しては述べておらず、「他者による注」³⁵として、古文献に対する後世の校訂者を主としてイメージした脚註について少しく論じているが、われわれが考えたいヴィーラントという翻訳者による脚註は校訂者によるそれと異なり、むしろ、小説の場合と同じく、翻訳という「テキストとパラテキストが相接する (...) 境界」に立つものとみなす必要があると考える。

ヴィーラントの『マクベス』に付けられた脚註には、ひとつに、読者層 Publikum に向けた、用語や登場人物、時代背景等の解説と呼ぶべきものが挙げられる³⁶。

- 古アイルランドの軽武装の歩兵はケルネ、重装備のものはガロ・グラッセと呼ばれた。
Waraci Antiqui, Hibern. c. 6: ウォーバートン (73)
- シネルは、マクベスの父。(77)
- ここは、ブリテン両島と三つの領地をはじめまとめたジェームズ一世へのオマージュとなっている。伝説によれば王家はバンコーを祖とする。(111)
- マルコムがマクダフと会話するこの場面は、さまざまなスコットランド年代記から採られている。ポープ (116)
- 瘰癧、あるいは王の病は、とりわけイングランドでは瘤と呼ばれ、エドワード懺悔王は手で触れるだけでその病を癒したという。(119)

最初の脚註はウォーバートンが英語版で記した註を簡潔に紹介したもの、さらに同様にポープの原註の紹介もあるが、それら以外は英語版の原註とは無関係に翻訳者ヴィーラントがドイツ語の読者のために、本文への解説として、いわば作品世界の外の情報へと延長する脚註を付したものである。一方、ヴィーラントは翻訳の脚註で、翻訳自体、テキスト自体についても触れる場合が

33 ジュネット：S. 373.

34 ヴィーラントの小説における脚註は、虚構的読者との対話性を帯びた脚註と事項についての解説的脚註の二種に吸収されると筆者は考える。Vgl. 拙稿：脱幻想化の過程としてのテキスト In: 「ドイツ文学」第103号 日本独文学会 1999, S. 122-130.

35 ジュネット：S. 381-384.

36 阿部氏は、ややあっさりとして「訳註」というパラテキスト(63頁)として議論を開始しているが、氏によるユングマン『アタラ』翻訳に係る訳註の分析を見れば、脚註のパラテキスト性の指摘は明らかである。氏は「『言語外現実』を補足する訳註 (...), 韻や掛詞など、言語表現そのものを補足するもの。それ以外にも役者による解釈を補う訳註」と分類している。阿部賢一『翻訳とパラテキスト』東京：人文書院 2023年。本稿で最初にあげるタイプの脚註が氏のいう「言語外現実」を補足する訳註である。

ある。先の引用と重複する脚註もあるが、ヴィーラント版『マクベス』脚註の全体像を眺めるべく、以下に挙げてみたい。

- この化け物じみた魔女の場面には時間と手間を注いでみただけのもの、それでも原作が持つ醜さ、荒々しさそしていかにも魔女めいたようすを完全に再現するのは不可能であった。それは、とりわけ韻を保持する必要があったからである。例えとして次の二行を引けば、私の意図を理解してもらうにじゅうぶんだろう。というのも、誰がこの韻文が持つ表現力と躍動をあえてドイツ語にしようなどと思うだろうか。

When the hurly-burly's done,

When the battle's loft und won. (72)

- この台詞の前半は、ポープの賞賛すべき校訂作業を経てなお、我等が作者によるもっとも判じがたい台詞のひとつである。(84)
- この場面と第四幕第一場は、別の言語に移しがたい。四揚音節のヤンプスと韻の調子を欠くならば、別ものに過ぎなくなるし、この場面が持つ気味が悪いながらも優雅な魔女の姿は雲散霧消するであろう。(107)
- 本作品の全体で魔女たちが話す場面は、すべて原文では韻を踏んでいる。(112)

『マクベス』に見られるこの二種類の、すなわち、本文の文言・表現への解説としての脚註と翻訳・作品世界に関わる脚註は、実のところヴィーラントの翻訳において頻出するといってよい。数例を挙げれば、1774年10月号「ドイツのメルクール」誌に発表した「プリニウス書簡 新試訳」³⁷における脚註、

- すなわち、マウリエヌスとその兄弟アルレヌス (82)

などは前者、読者のために情報を補う解説的脚註として分類できようし、

- 訳者の勘違いでなければ、これも外国由来のドイツ語のひとつであり、われわれの言語でいえば市民権に当たるだろうが、まさに同義の語はわれわれにはないし、およそ成熟した言語ならば対応する語を持っているはずのそれを拙く書き換えるのを避けるため。なにしろじつにしばしば置き換えには迫られるので。(83)

は後者、すなわち訳語に関わる解説またはイロニー的言説としての、自らの翻訳自体に関わる脚

37 Proben einer neuen Uebersetzung der Briefe des Plinius, von Wieland.: TM. October 1774, S. 73-96. 引用は本文中に頁数のみを示す。

註である。また、物語詩『レオノーレ』と並んで、ビュルガーの名前を現在に残す、いわゆる『ほら男爵の冒険』にも色濃く影響を与える、二世紀の文筆家ルキアノス『本当の話』のヴィーラント訳³⁸でも、

- ルキアノスはここで、全権大使たちに、太陽国側・月国側ともにそれらしい名前を与えるのが相応しいと判断しているので、それに合わせて可能な限りドイツ語でもそう訳する必要があると思われる。原典では、前者はピュローニデス、テリテス、フロギオス、後者はニュクト、メーニオス、ビュルランペスである。(163)

などは翻訳に関わる註釈と考えて間違いないし、

- この都市は、アリストパネス『鳥』で知られる。(171)

は、翻訳の語りの世界から逸脱した解説としての脚註である。

煩瑣になるためこれ以上の引用は止めるが、すなわち『マクベス』の脚註付翻訳とは、ヴィーラントの翻訳にとっては、むしろ標準的とも呼べる基本的文体なのである。舞台に供されるのを前提としたビュルガー訳に脚註がひとつも付されていないのは、演劇において脚註は再現し難いという理由に留まらず、『マクベス』翻訳をどのようにドイツ語で伝えたいかという翻訳への取り組み方の本質にその源が存するわけである。

5. 「移植」としての翻訳と「存続」としての翻訳

ゲーテは「ひとつの喩え」という短い詩で翻訳という営為に触れている。

近頃手折ったのが野の花ひと束
想い深く持ち帰るも
家に着く頃には手の温もりで
花冠はみな大地を向いた。
新鮮なグラスに野の花を入れると
なんという驚きだったろう！
花々はたかく頭をあげて
葉柄は緑の絨毯に

38 Lucians von Samosata. Sämtliche Werke. Aus dem Griechischen übersetzt und mit Anmerkungen und Erläuterungen versehen von C. M. Wieland. 4. Teil. Leipzig: Weidmann 1789. 引用は本文中に頁数のみを記す。

ヴィーラントの翻訳—加藤

それはいかにも生き生きと
あたかもいまも母なる大地に立つかのように。

かく賛嘆しつつ
私は外国の言葉となった私の詩を受けとめた³⁹。

この詩の一部を引きながらベルマンが指摘するように、ここでのイメージは「作品をより新たな土壌へ移植して再生させる運動として」⁴⁰現れている。すなわち移植という翻訳行為自体が問題ではなく、翻訳を通じて「再生させる」という目的が重要となる。それは当該書でベルマンが論じているベンヤミンの『翻訳者の使命』において「存（ながら）える生〈Überleben〉」あるいは「死後の生〈Fortleben〉」⁴¹として論じられる翻訳の本質と近似したものである。

ビュルガー訳の『マクベス』の結末部分は、

Macbeth. Ich will mich nicht ergeben, um den Staub vor des Knaben Malcom Füßen zu lecken, und ein Ziel zu seyn den Flüchen des Pöbels. Kam gleich Birnam's Wald nach Dunsinane, gear gleich meinen Gegner kein Weib, so will ich doch das Letzte versuchen. Hier werf' ich meinen Schild vor. Fall' aus, Macduff, und verdammt sey, wer zuerst ruft: „Halt! Genug!“. (368)

マクベス：降参などして、ガキ同様のマルカムの両足もとの塵を舐めるつもりはないし、有象無象の悪態の矛先になるつもりもない。バーナムの森がダンシネインに来ようが、我が敵を女が産んでいなかろうが、最後まで賭けるつもりだ。我が盾をかかげる。突いてみよ、マクダフ、先に「参った！やめてくれ！」といったものは地獄に墮ちよ！

と簡略化しつつ原文のマクベスの台詞がドイツ語にされ、

マクベス：（…）もういけない、嘆息と呪詛が我が身に押し寄せる、嵐のごとく、押しやり、煩悶する、大浪が下方へと私を巻き込んでゆく、下へ、下へ、地獄が私を引きずり降ろす、ああ、だめだ、永遠なる敗北だ、ああ。（絶命する）(369)

39 GSW: Bd. 2, S. 158.

40 アントワーヌ・ベルマン『翻訳の時代』岸正樹訳 東京：法政大学出版局〈叢書・ユニベルシタス1003〉2013年、102頁（原著：Berman, Antoine: L'Âge de la Traduction. Saint-Denis: Presses Universitaires de Vincennes 2008）

41 『ベンヤミン・コレクション2』浅井健二郎編訳 東京：筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉1996年、391頁（原著はベンヤミンのボードレール翻訳の序文として刊行：Baudelaire, Charles. Tableaux Parisiens. Deutsche Übertragung mit einem Vorwort über die Aufgabe des Übersetzers, französisch und deutsch. Heidelberg: Weißbach 1923）

とマクベスがのたうちながら絶命する描写が続く。そして、マクダフが新国王を讃える「マルコム王, スコットランド王, 万歳」(370), それに唱和する「スコットランド王, 万歳」(370)という皆の声で幕を閉じるのである。

一方、ヴィーラント訳では、ウォーバートン版原文通りマクベスとマクダフは戦いながら、舞台の袖へと消えてゆく。

Macbeth; Ich will mich nicht ergeben, den Boden vor des Knaben Malcom's Füßen zu küssen, und den Flüchen des lumpichten Pöbels zum Ziel zu dienen. Wenn gleich der Birnam-Wald nach Dunsinan gekommen ist, und du, mein Gegner, von keinem Weibe gebohren wardst, so will ich doch das letzte versuche. Hier zieh ich meinen Schild vor meinen Leib; schlage zu, Macduff, und verdammt sey der, der zuerst ruft: Halt, genug!

(Sie fechten, und entfernen sich vom Theater. Das Getümmel dauert fort.) (131)

マクベス：降参などして、ガキ同然のマルカムの両足もとの地面に口づけなどはしないし、卑しい有象無象の悪態の矛先を務めるつもりもない。バーナムの森がダンシネインまでやって来ようが、私の敵である貴様が女から産まれていなかろうが、最後に賭けてみるだけだ。ここに我が盾を我が身体の前にかかげる。さあ打ってみよ、マクダフ、先に「参った、やめてくれ！」と叫ぶものよ、地獄に堕ちよ！（二人は戦いながら舞台から退く。剣の響きは引き続き聞こえる。）

つまり、マクベスが斃れる場面は描かれず、その結末が暗示されるのみである。さらに新スコットランド王を讃える万歳のあとに、その新国王が、

マルカム：一刻も早く、我らが側へ皆が寄せた愛情を数え、それに報いたい。領主たち、親戚一同は、これより伯爵である、この称号はスコットランドにおいてはじめて与えられる。
(…)。(132)

と新国王自らが戯曲全体を取りまとめるような発言をして終わる。

一方、シュレーゲル／ティーク訳では、韻文として消化された訳文がヴィーラントの散文訳とほぼ同じ内容で示される。

Macbeth; Ich will nicht ergeben, um zu küssen
Den Boden vor des Knaben Malcom Fuß,
Gehetzt zu werden von des Pöbels Flüchen,
Ob Birnams Wald auch kam nach Dunsinan;

Ob meinen Gegner auch kein Weib gebar,
Doch prüf' ich noch das Letzte: Vor die Brust
Werf' ich den mächt'gen Schild; Nun magst dich wahren;
Wer Halt! zuerst ruft, soll zur Hölle fahren!
(sie gehen kämpfend ab.)⁴²

マクベス：降参して、ガキ同様のマルカムの足元の
地へと口づけるなどしはしない
有象無象の罵り声に煽られるなど。
パーナムの森がダンシネインに寄ってこようが、
我が敵を女が産んでいなかろうが、
最後に賭けてみるだけだ。胸の前に
力強い盾をかかげて。身を守るがよかろう
「まいった！」と先に叫んだものが、地獄行きだ！
(二人は戦いながら去ってゆく)

これらの最終場面の扱いを眺めると、同じウォーバートン版を底本としながら、ビュルガー訳は、若干感傷的な脚本として『マクベス』をドイツへと「移植」したように見えるし、ヴィーラント訳は、まるで作者シェイクスピアによる脚註のような新王マルカムの最後の台詞も含めて、『マクベス』全体像を可能な限り原作者の意図を損なわないように紹介した翻訳であることがここでも看取できよう。そして底本の異なるシュレーゲル／ティーク訳は過不足なく、韻文でシェイクスピアを翻訳しているが、その選択した語句は実のところヴィーラントが散文訳で選択したそれらと大きくは変わらない。

ビュルガーは、『マクベス』翻訳の序文で「私の訳が、なにか特別だとか、いままでの『マクベス』よりも優れているとか、不遜に自惚れようというものではなく、さまざまな友人たちが魔女の場面を気に入ってくれて、マクベス完成を急かしてくれた」⁴³のを、翻訳完成の理由のひとつとして挙げている。つまりは、外からの要求なりそれに応える気が本人になれば、ホメロス『イリアス』翻訳と同じく、『マクベス』も魔女のシーンだけの断片として終わった可能性があったわけである。そして、完成した翻訳も本稿で観察したように多分に自身の解釈を加え、原典の本質をドイツ語による上演用に置き換えた、「移植」を目的とした翻訳とも呼ぶべき作品となっている。

一方、ヴィーラントの『マクベス』は、ベルマンが指摘するように、翻訳されるべき作品が「ふ

42 SW: S. 348.

43 SS: S. 245-246.

さわしい時期としかるべき翻訳者とは相互に帰属し合う⁴⁴とすれば、確かに早過ぎた翻訳であったかもしれない。さらに、「A. W. シュレーゲル、フォス、ヘルダーリンのような翻訳者」は、「シェイクスピア、カルデロン、ホメロス、ウェルギリウス、ソフォクレス、ピンドロスが、ドイツにとってその翻訳の時に至ったことを」⁴⁵感じとり、それぞれに適った時期に翻訳したというのも興味深い指摘ではある。その意味でシュレーゲル／ティーク版シェイクスピアは、おそらく時期を得て韻文としての翻訳自体を通してその作品の Fortleben 〈死後の生〉をより確実に実現している現代的翻訳である。その現代性は、『マクベス』本文からのみならず、父ティークによって数ページにわたり付された訳註が、ヴィーラント訳とは異なり、脚註ではなく巻末註としてまとめられているという点、すなわち、文献的・文学的解説と原テキストの翻訳とを切り離す意思、翻訳テキストと訳註または解説それぞれの独立性を志向する意思からもはっきりと窺える。一方このロマン派による翻訳に先行するヴィーラントは、シェイクスピアの文体の特質を理解し、時代背景等を知ったうえで、二つの機能に分かれた脚註によってそれを読者に伝える。原テキストについては翻訳不可あるいは翻訳すべきではないと判断した場合には、テキストとパラテキストの境界にある訳註を本文と同じ頁に付し、戯曲の読みと並行しつつ要約などを記しながら、ドイツ語で読み聞くもののためにシェイクスピアの新たな版を作成した。その結果生み出された翻訳は、ドイツ語世界にシェイクスピア作品を接続してドイツ語の世界を広げつつ、「存続」させるための翻訳として成立していったのである。すなわち、ヴィーラントの翻訳はその初期のシェイクスピア訳においてすでに、ゲーテのいう「第三の時期」を予兆する「翻訳を原典と同一にして、あるものの代わりになにか別のもの、ではなく、あるもののその場所に別のものが相当する」ことを実現しようとした翻訳であり、ヴィーラントはテキストとパラテキストの間に立つ脚註を効果的に用いながらシュレーゲル／ティークに代表される19世紀的翻訳を先取りした翻訳者であったと本稿では指摘したい。

小説をはじめとするヴィーラントの創作作品では、テキストと脚註が分かちがたく結びつき、語りに重層的な対話性を与えながら総体として作品世界を成している。ヴィーラント作品について脚註なしに本文のみを読むならば、それはヴィーラント作品を読んだとは到底言えない。本文と脚註、そして序文などすべてが総体としてのテキストをなしているのがヴィーラントの創作作品群である。そして本稿で指摘するように、自由度が高い創作についてのみならず翻訳についても、翻訳テキストと強く結びつきそれゆえもはや純粋なパラテキストとは呼びがたい、テキストとパラテキストの間に置かれた脚註を含めた総体こそが、ヴィーラントの翻訳文体研究の対象であるべきことが、その『マクベス』翻訳からは窺えるのである。⁴⁶

44 ベルマン：105頁。

45 ベルマン：105頁。

46 本稿で指摘してきたように、ヴィーラントは、たとえば現代英語圏翻訳についてヴェヌティのいう「読みやすさ」を重視する「不可視な翻訳者」のまるで対極にあるような、テキストから浮上して饒舌をふるう翻訳者である。すなわち「19世紀までに英語圏の翻訳においては、つねに平明な言説を維持しながら、言語的・文化的相違を除

ヴィーラントの翻訳—加藤

(本研究は科研費課題番号22K00478の助成を受けている)

いていくという翻訳方法が確立」(S. 76) していったという文脈に立つ翻訳者ではない。Vgl. Venuti, Lawrence: The Translator's Invisibility. London/New York: Routledge 1995.

Wielands Übersetzung – Eine vergleichende Analyse von *Macbeth*- Übersetzungen und den Anmerkungen der jeweiligen Übersetzer

Kenji KATO

In den 1760er Jahren übersetzte Wieland 22 Stücke Shakespeares ins Deutsche. Dabei übertrug er nur das erste Stück in Versform, ließ aber auch Kürzungen zu. Obwohl Wielands Übersetzungen im 18. Jahrhundert eine gewisse Nachfrage erfuhren, wurden sie als Shakespeare-Übersetzungen im Allgemeinen nicht hoch bewertet. Dieser Aufsatz untersucht Wielands Übersetzung von *Macbeth* und vergleicht sie mit Bürgers Fassung, die zur Aufführung auf Basis von Wielands Übersetzung entstand, sowie mit der Shakespeare-Übersetzung von Schlegel/Tieck aus dem 19. Jahrhundert. Ziel ist es, die Besonderheiten von Wielands Übersetzung und seinen Stil, besonders seine eigne Nutzung der Fußnoten in den Übersetzungen, zu analysieren und seine Rolle als Übersetzer in der Übersetzungskultur des 18. und 19. Jahrhunderts neu zu bewerten.

Goethe diskutiert in seinem Kommentar zur *West-östlichen Divan* die Art und Weise des Übersetzens und ordnet Wieland der zweiten Periode zu, in der sinngemäße Übersetzungen dominieren und starken Einfluss auf die Zeitgenossen ausübten. Bei seiner *Macbeth*-Übersetzung merkte Wieland in einer Fußnote an, dass die Szene mit Hekate und den Hexen, „schwehrlich (sic) in irgend eine Sprache zu übersetzen (sic)“ sei, und stellte nur die Zusammenfassung der betreffenden Szene dar. Bürger hingegen übersetzte diese Stelle für die Aufführung, doch „alle ihre gräßliche (sic) und hexenmäßige Anmuth (sic)“, die Wieland in der Übersetzung zu reproduzieren wünschte, sind bei ihm nur annähernd eingefangen. Die Übersetzung von Schlegel/Tieck (in Wirklichkeit hier von Tiecks Tochter Dorothea) folgt Shakespeare enger und bewahrt das Versmaß in alternierender Vierhebigkeit in seinen Reimen. Allerdings wird durch eine Anmerkung Tiecks deutlich, dass diese Übersetzung erhebliche Schwierigkeiten bereitete.

Wieland entschied sich bewusst dagegen, schwierige Passagen unvollständig zu übersetzen, und erläuterte stattdessen den Originaltext in Fußnoten, um so ein umfassendes Bild von Shakespeares Text zu vermitteln. Gérard Genette bezeichnet Fußnoten in Romanen als „flüchtige, schwer fassbare Elemente des Paratextes“, die sich an der „schwankenden Grenze zwischen Text und Paratext“ befinden. Dies trifft auch auf Wielands Romane zu, in denen er fiktive Fußnoten, Anmerkungen von Figuren, originelle sowie nachträgliche Kommentare einsetzt, um eine kohärente Welt im Roman zu erschaffen. Ebenso in Wielands Übersetzungen erfordern die Fußnoten eine Analyse im Kontext dieser Text-Paratext-Grenze, da sie sowohl erläuternd als auch ironisch wirken und das Gesamtgefüge des übersetzten Textes prägen.

Unter Berücksichtigung von Antoine Bermans Interpretation von Benjamins Übersetzungstheorie in *L'âge de la traduction* lässt sich sagen, dass Bürgers Fassung eine „Transplantation“ des Originals für die deutsche Bühne darstellt. Wielands Übersetzung dagegen, die das Original durch Fußnoten erläutert und in seinem Gesamtzusammenhang vermittelt, kommt Benjamins Idee des Fortlebens nahe. Die Schlegel/Tieck-Übersetzung wiederum strebt eine möglichst getreue Nachbildung des Originals an und ergänzt die Übersetzung durch literarische und philologische Endnoten, die Tieck vielleicht absichtlich nicht als die dem Text näheren Fußnoten, sondern als unabhängigere Endnoten verwendet haben könnte, womit sie als ein Beispiel für das Fortleben gelten kann.

Indem Wieland die Grenze zwischen Text und Paratext vielseitig und funktional auslotet, schafft er eine neue deutsche Version Shakespeares für Leser und Zuhörer und erweitert so die deutsche Sprachwelt. Dadurch trägt er zum Fortleben von Shakespeares Werk bei und verwirklicht Goethes Ideal der dritten Übersetzungsphase, in der „eins nicht anstatt des andern, sondern an der Stelle des andern gelten solle.“ Wielands Shakespeare-Übersetzungen sind somit ein Bindeglied zwischen der Übersetzungskultur des 18. und 19. Jahrhunderts und streben bereits in Richtung dieser von Goethe beschriebenen dritten Epoche der Übersetzungspraxis.